

平成 30 年度 森林総合研究所九州地域公開講演会および 70 周年記念行事開催報告

開催日時：平成 30 年 10 月 30 日（火） 13 時 30 分～16 時 30 分

開催場所：くまもと県民交流館パレア 10 階パレアホール（熊本市中央区手取本町 8-9）

テーマ：九州支所 70 周年・九州育種場 60 周年 —最新の研究—

参加者数：86 名

基調講演

○森林研究・整備機構 理事（研究担当） 田中 浩

森林総合研究所の研究と地域への橋渡し —これまで、そしてこれから—

地域の森林・林業・木材産業のための研究開発とその成果の橋渡しを進めるとともに、長期的なビジョンのもとに進めるべき研究のロードマップとして自ら策定した「2050 年の森」の達成に向けて、森林総合研究所、林木育種センターが取り組んでいる研究開発について紹介された。

講演

○九州支所 森林資源管理研究グループ 主任研究員 横田 康裕

木材のエネルギー利用 —持続的な社会構築に向けての取り組み—

2012 年の固定価格買取制度（FIT 制度）の施行以降、木質バイオマス発電事業が日本各地で増えている。また、木材のエネルギー利用は、地球温暖化緩和に加え、地方創生や国連「持続可能な開発目標（SDGs）」等への貢献が期待されている。これらを背景として、理想的な発電事業のあり方について報告された。

○九州育種場 育種課育種研究室 主任研究員 松永 孝治

より強い第 2 世代マツノザイセンチュウ抵抗性品種開発の取り組み

マツ材線虫病被害は高緯度・高標高地へ拡大しており、気候変動による被害地の拡大が懸念されている。より抵抗性の高い第 2 世代品種を効果的に開発するための技術開発や抵抗性品種を有効に活用するための研究成果について報告された。

○九州支所 森林微生物管理研究グループ 主任研究員 木下 晃彦

国産トリュフの栽培化に向けた取り組み

日本国内には 20 種ものトリュフが棲息し、いくつかの種は食用として有望である。そこで、発生量が多く、大型になり、香りの良い 3 種のトリュフに着目した国産トリュフの栽培化技術の研究開発について、これまで得た知見や今後の展開について報告された。

○九州支所 森林動物研究グループ 主任研究員 末吉 昌宏

九州・沖縄のキノコ栽培に被害を及ぼす害虫とその防除・対策

近年、様々な種類の食用きのこが栽培されており、菌床栽培が主流であるが、九州では原木栽培も盛んである。従来の害虫に加え、新たな害虫種による被害が報告されており、九州・沖縄では菌床・原木ともにその被害対策が重要である。現状の被害対策である捕獲に加え、予察や予防、新しい防除方法について報告された。

○九州支所 森林動物研究グループ 主任研究員 小高 信彦

中琉球固有種オキナワトゲネズミの絶滅回避のための取り組み

世界自然遺産の候補地の一つである沖縄島北部に固有種のオキナワトゲネズミは、夏は昼行性、冬は夜行性といったユニークな生態を持つ、日本で最も絶滅が危惧される哺乳類の 1 種である。沖縄島北部の「顕著で普遍的な価値」を代表する本種の絶滅回避のために必要な森林生態系の管理に関する研究成果について報告された。



開会あいさつ



基調講演（田中理事）



会場風景



講演 1 (横田)



講演 2 (松永)



講演 3 (木下)



講演 4 (末吉)



講演 5 (小高)



閉会あいさつ

・ 70 周年記念懇親会

講演会終了後、アークホテル（熊本市中央区城東町 5-16）にて、7 名の九州支所 OB および 26 名の現職員にて懇親会を開催した。各 OB の近況報告や在職当時のエピソードを伺いながら、新旧交えての貴重な意見交換の場となった。

また、懇親会の会場では 70 周年記念誌（CD および簡易製本）を OB にお渡ししたほか、竣工した共同実験棟建設過程を記録した定点撮影画像を放映した。

・ 70 周年記念植樹および記念撮影

講演会翌日、田中理事に出席いただき、植樹式を執り行った。多摩森林科学園から提供いただいたエドヒガンザクラの苗木 2 本を植樹した。この場を借りてお礼申し上げる。

記念植樹の後は、出席した職員での記念撮影を行った。

